

家田莊子

長編ハード・
バイオレンス
書下ろし

縄張り

死の六本木抗争

NON NOVEL





NON NOVEL

「ノン・ノベル」創刊にあたって

「ノン・ブック」が生まれてから二年一ヵ月、ここに姉妹シリーズ「ノン・ノベル」を世に問います。

「ノン・ブック」は既成の価値に「否定」を發し、人間の明日をささえる新しい喜びを模索するノンフィクションのシリーズです。

「ノン・ノベル」もまた、小説を通して、新しい価値を探っていききたい。小説の「おもしろさ」とは、世の動きにつれてつねに変化し、新しく發見されていくものだと思います。

わが「ノン・ノベル」は、この新しい「おもしろさ」發見の営みに全力を傾けます。

ぜひ、あなたのご感想、ご批判をお寄せください。

昭和四十八年一月十五日

NON・NOVEL編集部

NON・NOVEL—323

長編ハード・バイオレンス 縄張り 死の六本木坑争

平成2年6月20日 初版第1刷發行
平成4年4月1日 第3刷發行

著者 いえだ しょうこ 家田 莊子

発行者 伊賀 弘三 良

発行所 しょうでんしゃ 祥伝社

〒101 東京都千代田区神田神保町 3-6-5
九段尚学ビル

☎ 03 (3265) 2081 (営業)

☎ 03 (3265) 2080 (編集)

印刷 萩原 印刷

製本 明泉 堂

万一、落丁・乱丁がありました場合は、おとりかえます。Printed in Japan.

ISBN4-396-20323-3 C0293

©Shoko Ieda, 1990

長編ハード・バイオレンス

家田莊子 縄張り

— 死の六本木抗争 —



NON NOVEL

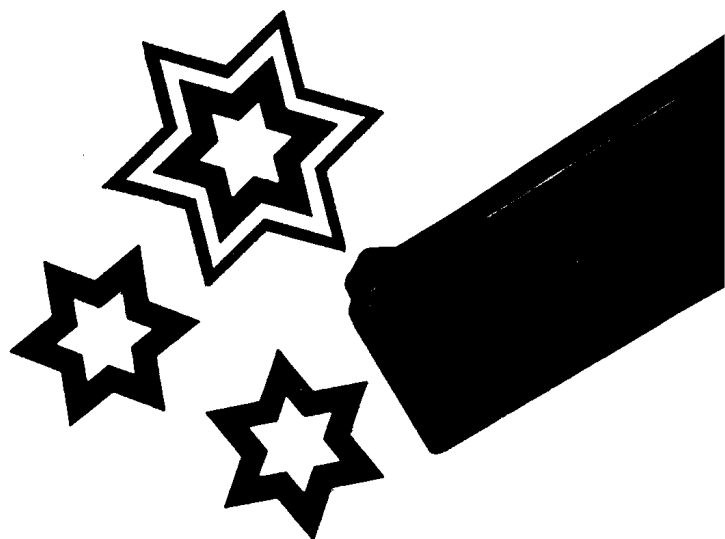
祥伝社

目次



1章	新興勢力	
2章	縄張り侵蝕 しんしよく	
3章	抗争突入	
4章	残虐ビデオ	
5章	地獄への道	
6章	極道の正体	
7章	抗争の果て	

193	161	128	95	66	34	7
-----	-----	-----	----	----	----	---



カバーイラスト・畑野賢一
本文イラスト・山野辺進
カバー構成・EE大林真理子

1章 新興勢力

1

「六時か……」

男はダイヤモンドに埋もれたピアジェの腕時計を見ると窓辺に歩み寄った。

十二月の夕闇に沈んでいた赤坂一丁目の街が、突然明るくなった。米国外使館の裏手に建てられたビクトリア王朝風宮殿の入口に「AZIZA」と蛍光色のライトが点灯されたからである。

「ちきしょう。ついに開店しやがったか」

六本木アークヒルズの十七階にある自室から、双眼鏡で眼下を望みながら、男は舌打ちをした。

「七瀬二郎、よくも恥をかかせてくれた。落とし前は、これからきつちりとつけてやる」

＊

オープニングパーティーへ参加するため、店の前で待機していた客たちが、そろそろと、入口の方へ移動を始めた。

男は全員がタキシード。女はさまざまな素材のドレスの上に、一様に毛皮をまとっていた。

ディスコAZIZAの開店は、二カ月ほど前から六本木の遊び人連中の間で噂され、かなりの期待を寄せられていた。会員制のVIPルームの他、レストランや、ビリヤード場、ダーツ場など、遊び人に必要なものは、すべて揃っていた。

建物自体が、宮殿の形をしており、地上三階、地下一階、中もすべてビクトリア王朝風に内装され、

客が手を触れる所はすべて大理石が使われていた。

DJには、ニューヨークとマイアミから「一曲かけていくら」という支払い方式でアメリカ人が二人引き抜かれ、国内オーディションで選ばれた日本人一人を加えた計三人が、交替で就いている。

ウェイターは有名一流店からの引抜きと、テレビの公開オーディションによって選ばれた、仕事ができる「イイ男」たちばかりだった。

値段もけっして安くはなく、さらに金を出せば出すほど贅沢ぜいたくができるという、すでに東京じゅうのディスコに飽き飽きしていた遊び人たちでも、充分たの愉しめるところだった。

AZIZA宮殿が米国大使館の裏手、六本木側に誕生したことによって、これまで殺風景だったこの地区に、急に活気が溢あふれ出したのである。

無料で配られた二百枚のオーブニングパーティの招待券が、当日には一枚二万円という値段プレミアムがついて、巷ちまたで売られていたことから、AZIZAの人

氣ぶりが窺うかがえた。また入会金五十万円、年会費二十万円のVIPカードも、開店当日には百万円にはね上がり、入手できなかった人間のために、新しくセミ会員券が用意されたほどだった。

しかし、AZIZAの誕生を快こころよく思っていないかったのは、これまでディスコ業界で名を成してきた有名店だけではなかった。

*

「行きますか、二代目」

男の後ろに立っていた、坊主頭ぼうずの巨漢が歩み寄って来て尋ねた。

男は、双眼鏡を床に放ってから無言で頷うなずいた。

線の細い、一見すると美容師タイプの男が、クローゼットからテンのロングコートを持って来て、二代目と呼ばれた男の肩にかけてやる。

それでも男の視線は、眼下の宮殿アジューザを見下ろしたままだった。その左手には、いつの間にかジャック

ナイフが握られている。鼻先までかかる長い前髪が、送風口から送られてくる温風で、後方になびいていた。

眉が太く、キツネのような目をした男——彼の名を海童浩司かいどうこうじという。人からは、「二代目」と呼ばれ畏怖いふされている。広域七暴力団の一つ、神日道総連合、海童組組長海童仙かいどうせんの一人息子である。

海童組は、六本木に本部を置き、構成員八十人を擁ようしていた。神日道総連合傘下の中で一番の稼かせぎ頭だった。というのも、これからの極道は武力より財力だと早くから読んでいた、切れ者で知られる海童仙が、経済に強い組員を集め、闇金融や不動産業に力を注いできたからである。しかも、政界の裏面を牛耳ぎゅうじる保守党大物代議士前田虎吉まえだ とらきちという、強力な味方も得ていた。

こうして頭角を現わしてきた海童仙は、今や六本木に多くの不動産を所有し、「ビル王」とまで称される大物になった。

そんなわけで、二代目を知らない者は、六本木ではもぐりだった。二代目の太い眉の動き方一つで、店を潰つぶすことも可能だったからだ。

しかし、それもA Z I Z A が開店する前までのことだった。

*

「聞いてねえぞ、俺らはよ」

客の列をかき分け、突然十人ばかりの男たちが、A Z I Z A の入口前に立ちはだかった。

客たちが悲鳴を上げて左右に散らばった。

黒い壁を作った男たち——彼らは六本木の遊び人を自称する者なら、誰でも見かけたことのある顔ぶれだった。自ら、オリンポス軍団と名乗り、一人一人が古代ギリシアの神々の名を通称として持っていた。

そもそも、典型的な経済派ヤクザである海童組が、武闘派としての側面を補うために結成させたと

いって過言ではなかった。

海童浩司は、若く、血氣盛んな彼らを、自分のボディガードとして利用する傍ら、縄張りである六本木から吸い上げる甘い蜜も分け与え、オリンポスの会長として君臨していたのである。

一番前へ進み出たのは、海童のボディガードで、オリンポスのリーダーでもある巨漢アポロこと山岸明^{あきら}だった。彼は、宮^{ミヤ}殿^{テン}前で、招待客の案内をしていた黒^{マネー}服^{ジー}五人のうちの一人の胸倉を掴み、丸太のような左腕で吊り上げながら怒鳴った。

「おい、二代目への挨拶なしで、ディスコを開店^{オープン}できないことぐらい、判^{わか}ってるだろうが」

吊り上げられた黒服は、薄化粧した美しい顔を歪めながら、必死に足をばたつかせた。

「何か言えよ。今ならまだ遅くねえぞ」

山岸の右拳^{こぶし}が、黒服の顎^{あご}を強烈に直撃した。声を上げるより早く黒服は、入口脇にある噴水の中に頭から突っ込んだ。

「アポロ、やりすぎだよ。この店長は、本当に筋つてものを知らなかったのかもしれないじゃないか。それを教えてやれば、すぐ二代目の配下になるだろうに、従業員を傷つけちゃやばいよ」

薄いサングラスをかけ、口元にうすら笑いを浮かべながら、山岸の隣りにいたメビウスと言われる男中島^{なかじま}豊^{ゆたか}が言った。大日本大学理事の息子である。

「かまうもんか」

山岸は恐怖に怯^{おび}えている黒服を次々に殴り、事態の成行きを見守っている客の群れの中に投げ飛ばした。その都度^{つど}、女性客の間から鋭い悲鳴が上がる。

「何ごとだ」

と、言いながら真っ白なタキシードに、真っ赤なシルクのボウタイをした美青年が、ただならぬ外の気配を察したのだろう、店の中から慌^{あわ}てて飛び出して来た。が、山岸の姿を見ると、瞬時に顔が青ざめていった。

「おう、お前は『キラ・クイーン』の支配人じゃ

ねえか」

山岸が舐めるような目つきで、男に近づきながら、

「お前がここの店長になったってことは、本来の筋を知らねえはずないよな」

店長と言われた男は、恐怖と緊張のせいで立ち竦んでいる。

山岸は、さらに鼻先が触れるほどに近づき、店長の周囲をゆっくりと歩きながら、

「どうして、二代目に挨拶に来ないんだ」

と気味悪いほどに優しい口調で言った。

「そ、それは。二カ月前、二代目が七瀬さんに負けた時から……」

「なんだとっ」

という怒声と同時に、山岸の巨大な拳が、店長の細い顎を直撃した。骨の碎ける鈍い音がして、店長は鼻から血を噴き出し、枯葉のようにコンクリートの階段をころがっていた。

「行けっ」

山岸の号令でオリンポスのメンバー三十人が、一気に店内に雪崩れ込んで行った。

「七瀬二郎の奴……」

前髪を掻き上げながら、男の酷薄な性格を表わすかのように黒服たちの血の跡をゆっくりと踏んで、海童浩司が最後に宮殿へ入って行った。

ほどなく爆音とともに、宮殿内にオレンジ色の炎が弾け、パニックに襲われた客たちが、次々と飛び出して来た。

2

噴煙の充満した踊り場で、オリンポスの一団が暴れていた。

「七瀬、どこだ。出て来い！」

ディスコ音 楽が止まり、逃げ遅れた客たちの悲鳴も鎮まり、辺りには静寂だけが残った。やがて噴

煙が、出口に向かつて流れ始めた。

と、その時、

「六本木は、一部の人間の街じゃないんだ。ここに来る一人一人が、この街の主人なんだ……」

低い、澄んだ声がした。

踊り場にいたオリンポスの男たちが、慌てて声の方を見遣る。視界を塞いでいた煙が、やがて薄れ、総ガラス張りで純金に縁取られたVIPルームが見えてきた。中には、七、八人の人間がいるようだった。

「君たちに、このデイスコを爆破する勇氣なんかないことは判ってる。占領下に組み込んだ時、人は簡単に替えがきくが、建物を壊せば、修理に時間と金がかかりすぎるといふわけだ。だがこんなオモチャの脅しで、俺が降伏するとも思ったのか」

「七瀬っ」

オリンポスの一団が、口々に叫んだちょうどその時、煙の中から、女二人に囲まれ、ソファにすわっ

ている男の顔が、鮮明に浮かび上がった。

「野郎」

シャンペーンカラーのタキシードに革のボウタイをした長身の男が、切れ長の目に冷たい笑みを浮かべていた。

日本人には珍しい筋の通った高い鼻と、意志的に結ばれた唇。やや細面で、卵型の顔。見る者に凛々しさを感ぜさせる男だった。襲って来た男たちと同じようにまだ若い。年齢は二十歳ぐらいか。

この男こそ六本木の皇帝と、若者たちの熱い支持を受け、二カ月前に結成された「アジューザ」という新しい軍団に君臨している七瀬二郎だった。

ここデイスコAZIZAは、海童組とオリンポスのまったく息のかからない、記念すべき初めての店だったのである。

この騒ぎに動じる気配もなく、七瀬の腕に寄り添うように手を廻しているのは、観客動員数一、二を争う女優の川元麻美と、アイドル歌手の南まどか

だった。

「七瀬っ、今日こそ決着をつけてやる」

山岸が怒号したと同時に、オリンピックのメンバーが、踊り場いっぱいに散開した。

二郎は、うっすらと笑みを浮かべて、麻美とまどかの額にキスをする、静かに立ち上がった。

「オリンピックの精鋭ってわけか。それにしちや人数が少ないな」

二郎は、VIPルームと一般席をつないでいる五段の階段をゆっくりと下りて行った。後からVIPルームにいた男たちがそれに続こうとしたが、

「一人で大丈夫だ」

と、オリンピックの一団に聞こえないくらいの小さな声で制した。

「さて、このまま帰っていただけるのでしたら、事は穏便にすませますが――」

「この野郎！ かっこつけるんじゃねえ」

ポケットからナイフを取り出し、二人の男が七瀬

に向かって突っ込んで行った。

二郎は笑みを浮かべたまま踊り場に下り立つと、すっと左足を上げた。一秒後、はね上げるように伸ばされた爪先は、ナイフを持って突進して来た男の鳩尾に、深々とめり込んでいた。

ナイフが床にころがり、従業員が慌ててそれを拾い上げる。

最初の男が床に倒れ伏すより早く、二郎は右足を軸に滑らかに体を回転させ、背後から襲って来た男の顎に向けて、左足を蹴り上げた。素晴らしいスピードである。

グエツというぐもった音とともに、黄褐色の液体を口から噴き出した二人は、ゆっくりと床に倒れ伏し、動かなくなった。

「次！」

二郎の静かだが、鋭い声に威圧され、男たちは、じりじりと後退を続ける。二郎は、半身の自然体から、顎と胸前を軽くガードするように両拳を構え、

すすつと前に出た。

「やれっ！」

山岸に背を押されて飛び出した男たちが、獣のような声を上げて、突進して来る。

二郎は、先頭の男の顎に、掬い上げるように右拳を叩き込み、次いで側面から襲って来た男へ、左足をはね上げた。

二本のナイフが、ほとんど同時に宙へ飛ぶ。

さらに二郎は、右足を軸にして体を反転させると、正面にいる男の腹に左足をぶち込んだ。男の体が、一瞬、宙に浮き、エビのように痙攣して、床に容赦なく叩きつけられる。

二郎は、続いて突っ込んで来た男の内臓に後ろ蹴りで、タキシードシューズを埋め込んだ。

子供の時から現在まで、空手で鍛えてきた二郎にとって、相手の急所を一発で狙うことなど、たわいもないことだった。

一人、二人と血に混じった汚物を口から噴き出し

ながら男たちが踊り場に倒れ込む度、二郎の白いズボンに褐色の模様が作り上げられていく。

瞬時にして、味方が倒されるのを見て、男たちの攻勢が熄んだその時、バーンという空気が弾けたような音とともに、二郎の左肩をオレンジ色の閃光が走り抜けた。

「ウッ」

焼け火箸を突き刺されたような激痛が、二郎を襲った。肩を右手で押さえ、耐えきれず膝を折った。次の瞬間、二郎の頬を擦過して、三十八口径の二弾めが、放たれた。

「そこまでだな、七瀬」

山岸が、銃口に息を吹きかけながら近づいて来た。

「アポロ……。それを使ったらおしまいだってこと、判ってるのかっ」

二郎を助け起こそうと、駆け寄る若者を、
「来るな」

と鋭く制止してから、二郎は山岸を見据えた。頬の傷から、簾のように血が流れ落ち、真っ白なシャツを汚していった。

「へへへ……」

山岸は、分厚い唇に野卑な笑いを浮かべて、拳銃を撫でまわした。

しゃがみ込んでいる二郎の額に、脂汗が滲んでいた。

「何が皇帝だよ。笑わせるんじゃない」

山岸はウエスタンブーツを履いた右足で、二郎の顔を蹴り上げようとした。

だが、二郎は、山岸の蹴りを左肩で受け流し、次いで山岸の右足を、痛みをこらえて両手で抱え込むと、上体を床に投げ出した。そしてその勢いを利用して素早く立ち上がり、均衡を失ってよろめく山岸の左足の付け根に小さく鋭い蹴りを飛ばした。

「グエッ」

山岸の巨体がグラッと傾き、背中から床に叩きつ

けられ、持っていた三十八口径を手放した。

大理石の床に頭部を激しく打って、苦痛に呻いている山岸に近づくと、二郎はダメ押しするかのようにな、ふわりと宙に飛んだ。そして鉤型にした右肘を下に、山岸の巨体の上に舞い下りた。容赦のないエルボーブロック攻撃である。

腹部を直撃されて、巨体がまるで魚のように痙攣し、やがて力を失いぐったりと仰臥した。

「いいか、二度とこの街へ顔を出すな」

そう言って、二郎はやおら体を起こし、山岸の胃を服の上から掴み、

「判ったなあ」

と言った。

「グググ……ッ」

山岸の口から血の塊が噴き出た。二郎の、まるで胃袋を掴み出さんとするかのような、凄まじい握力である。山岸の顔が、みるみる蒼白に変わっていく。